

支え合うシングルマザー

話題 スポット

「人じゃない」実感

たった一人で子育てに奮闘するシングルマザー。そんな彼女たちを支えるシェアハウス「Mother Leaf (マザーリーフ)」が朝霞市幸町にオープンしてから、半年がたった。入居者たちはそれぞれ悩みを抱えながらも支え合い、「人じゃない」ことを実感しながら日々を送っている。

(中野えみり)

ピンポン。玄関のチャイムが鳴るとぴが居た。この日は入居者たちの誕生日パーティー。テーブルの上にはたくさんの皿とコップが並ぶ。

「かんばしい」このぴがおいしい。母子たちの会話が弾み、リビングにきやかな時間流れる。じつとしていられない子どもたち。母親も世話に追われるが、そんな大変さも笑って過ごす。

母子たちが暮らすマザーリーフは、今年5月、不動産業を営む小山弘晃さん(48)が始めた。急増するシェアハウスとシングルマザーに着目、両者を掛け合わせ何かできないかと考えた。8階建て6世帯用のシェアハウスには現在、8世帯の母子が暮らす。

リビングやキッチンなどは共有。洗濯機や炊飯器、基本的な調味料なども一緒に使っている。

◆合言葉は「子ども見て」

約1カ月前にマザーリーフに入居した美花さん(28)は、仮名は「1歳と3歳の女児2人の母親。離婚する前から夫と別れて暮らすことを考えていた。夜間の仕事を始め、仕事が終わった早朝4時に長女を迎えに託児所へ行く日々。眠りに就きたい美花さんとは逆に、長女は泣きたたりいたずらをしたり。「何やっつてんの」。思わず大きな声を出したことも。仕事や子どものため、体調が悪くても病院に行かないことさえあった。そんな生活が続き、精神的に追い詰められていた。

マザーリーフに引っ越し、次女が生まれてからは洗濯も出掛ける準備も2倍の時間がかかった。赤ちゃんの面倒を見るため、あまり部屋からも出られない。「泣き声ばかり聞いていると気がおかしな気がする」。大変な日々は続く。

朝霞に専用の入居して「心に余裕」 シェアハウス



誕生日パーティーで動き回る子ども世話に追われる母親たち。共有のリビングでは母親同士で情報交換をすることも。朝霞市幸町のマザーリーフ

それでも、シェアハウスには助け合える仲間がいる。ミルクやお風呂の時など互いにお願ひすることはしょっちゅうだ。ご飯や買い物も共に行ったり、掃除の籠りや小さくなった子どもの服を譲ったりすることも。美花さんは「心に余裕が出てきた」と言い、同じような境遇にある人たちの存在が心強くと感じている。

◆ほんのちよつとの助け 厚生労働省の全国母子世帯

等調査(2011年度)によると、母子世帯の約20%が「相談相手がいない」と回答。そのうち「相談相手が欲しい」とした人は60%を超える。

家庭内暴力(DV)やうつ病、生活保護、仕事、両親。オナチの小山さんも入居者たちと関わる中で、いろんな悩みを抱えるシングルマザーを見ときた。

その中で感じたのは、誰にでも母子家庭になる可能性があり、なつた途端に経済的な問題や孤立などといった厳しい現実が待ち構えているということだ。一方で、シングルマザーたちが集つてコミュニティーや専用のシェアハウスのような場所は少ない。だから「誰か語り相手がいる、ほんのちよつと助けしてくれる」。そんなシェアハウスにした